

模範愛育班の指定

愛育班を普及し、その活動を充実させるため、次の条件により模範的な愛育班を「模範愛育班」と指定し、見学実習の場とさせていただきます。

指定は毎年4月1日より翌年3月31日までの1年間です。

1. 愛育班組織が確立し、その活動が他の模範となるものであること。
2. 愛育班活動の見学実習地として、本会が行う研修会の研修生又は他市町村の愛育班関係者を受け入れることができること。

平成27年度は下記の愛育班を指定します。

埼玉県白岡市母子愛育会

山梨県南アルプス市愛育連合会

「愛育班員の手記」入選者一覧

優秀作

県名	氏名	所属	タイトル
福島県	うえはらあいこ 上原愛子	南相馬市母子愛育会	出来ることをする・無理をしない・楽しんです

佳作

県名	氏名	所属	タイトル
山梨県	ほさかたえこ 保坂多枝子	北杜市母子愛育会	高根愛育班の発足と活動について
兵庫県	みわりかこ 三輪梨花子	豊岡市竹野南愛育班	いままでとこれからと

優秀作

出来ることをする・無理をしない・ 楽しんでする



福島県南相馬市母子愛育会 上原 愛子

私たち母子愛育会は震災の翌年、原発事故後の放射線量が心配な中で「子育てをしているお母さんたちのために活動してくれるお節介おばさん」を募集しているという、保健センターからの案内で、20名の仲間が集まりスタートしました。

お母さんたちは普通の子育てでも大変なのに、そこに放射線という爆弾を抱えたのですから、その不安はとても大きなことだったと思います。そんなお母さんたちに自然に優しく接するためにはどうすればいいのか、何をしてあげればいいのか、話し合いでは実現不可能な内容も飛び出し「ついていけない」と脱会するメンバーも出てしまいました。

それまでの活動は乳幼児健診でのお手伝いや託児でしたので、あまり達成感がなく、本当に自分たちは必要とされているのか、楽しんでやるのがモットーだったのに負担になっているのではと、会長としてとても悩みました。

そこで、自分たちの活動の方向を確認するために、お母さんたちとの懇談会を持ちました。驚いたのは参加者のほとんどが市外や県外から転入していた方でした。南相馬市のお母さんは周囲に友人や家族がいるから不安が軽減されるのか。みんなが避難している中で知らない土地で生活しなければならないお母さんの大変さを改めて実感しました。

お母さんたちは子育ての中で「ほんの少しだけでもいいから自分の時間が欲しい」という思いが大きかったので、自分たちができるお点前で、一息ついてもらうことにしました。

お茶会はお母さんたちに好評で「またやってほしい」という声に会員たちの気持ちも少しずつまとまったように感じられました。またお茶会は幼稚園での「茶道教室」と広がり、こ

どもたちが大変喜んでくれたこと、先生方から「こどもたちのお行儀がよくなったような気がする」との声をいただき、初めて達成感を味わいました。このような思いを重ねていけば会員は一つになれるかも！と、少し自信ができました。

その後愛育会発足記念として母子愛育会のご支援をいただき、富田富士也先生をお招きして講演会を開催しました。先生のお話に心を打たれ、若いお母さんたちも涙する場面を見て「もっと多くの人に聞いてもらい」と興奮しました。先生の講演会の再演を必ず実現させたいと思います。

また、今年度は会員が発案したことをみんなでやってみることにしました。そこで私は100本の苗を自分の畑に植え、お母さんたちに南相馬市の土や作物が安全になっていることを知ってほしいと思い、芋ほり大会を提案しました。大きくなるにつれサツマイモは本当に大丈夫なのか、掘るときに土は問題ないのかなど、不安が広がり、計画するのではなかったという思いが浮かんでしまいました。

しかし、大きくなったイモの放射線量は全く問題なく、芋ほりに熱中するお母さんやサツマイモで作ったおやつをほおばるこどもたちの笑顔、そして会員たちが笑って一番楽しそうに手伝ってくれて「大成功」でした。

とても残念だったのは、お手伝いをしてくれるといってくれた会員の姿がなかったことです。彼女は原発事故で避難し、そして体をがんに侵されながらも「自分にできることなら」と、体調の良い時は必ず参加してくれ、「愛育会員としてお母さんをサポートしながらも実は自分がこどもたちの笑顔からパワーをもらっているのよ」とよく話していました。

あの時保健センターの呼びかけに参加していなかったら、私はただのおばさんの時間を過ごしていたような気がします。また愛育会に入会したからこそ、豊後高田市の皆さんとつながり、素敵なエプロンを作っていただくことになりました。何もできなかった私たちを「みなさんはできる、すばらしい」と盛り上げながらいつも一緒に寄り添ってくださった保健師さんに感謝しています。これからも「できることをムリしないで楽しんで」活動していきたいと思います。

佳作

高根愛育班の発足と活動について



山梨県北杜市母子愛育会 保坂 多枝子

高根町では、昭和33年～平成11年までの間、婦人会があり、その中に愛育部がありました。婦人会の廃止とともに休会していました。北杜市の8町のうち4町のみに愛育班の活動があり、全市に活動を広げることを目的として、休会地区への働きかけがされました。

保健師さん・北杜市母子愛育会参与の新藤先生と話し合い、第一段階として子育てに関係する団体の長に集まっていただき「子育ての重要性」を北杜市母子愛育会参与の新藤先生にお話をいただきました。「もう少し深い話をききたい」という意見の中で第2回目の機会を持つことになりました。その学習会・意見交換の中で「愛育会が大切」だという声があり、20名程の参加者全員が発起人になり、その中から7名の方が代表者として関わっていくことになりました。

まず、各種団体の総会に出向き、説明の機会をもらい、延べ149人にお話をすることができました。区長会にも説明に伺わせていただきました。

次に、活動対象の受け手となるお母さんを対象に町内の全保育園に出向き説明会を開きました。延べ155人の出席をいただき「早く立ち上げて欲しい」「子育てに安心ができる」といった前向きな意見を頂きました。おせっかいお婆さんの活動と思われぬ心配でしたが、反対にお母さん方の言葉に勇気をもらい、背中を押された形となり次のステップに進むことができました。

そして、より多くの人に理解をしてもらうために、各地区を一つずつ回って親しく話す機会を設けたほうが良いということになり、発起人7人と保健師、参与の新藤先生で「キャラ

バン隊」を組み、各会場に出向いて「愛育の必要性」について説明することとしました。初めに各区長、班長、発起人、以前に説明を聞いていただいた方などに集まって頂きました。地区の状況にあわせた日程や会場を決めていただき、「地区巡回説明会」を行いました。会場の手配や準備にも、各区長・班長・関係者の方が私たち発起人以上の思いになってご協力くださり、12会場で358人とたくさんの方が出席してくださいました。参加者からは「愛育会の必要性が理解できた」「子どもは地域みんなの手で見守らなければならない」「愛育会はまちづくりにつながる」「愛育を早く立ち上げて欲しい、協力したい」といった感想がたくさん寄せられました。

こうした経過を経て、平成26年5月10日に高根愛育班がようやく誕生しました。2年6か月がかかりました。設立してからも、一人でも多くの人の理解を得るために何十回と説明をしてきました。新藤先生の愛育に対する熱い思いや保健師さんのたゆまぬ努力、地域の方々のご協力そして子どもたちをこよなく愛してやまない発起人の方々の力があってこそ愛育班が発足できたのです。

発足してから現在大きく3つ程行った事業があります。「乳幼児への声かけ・訪問」は、班員の訪問を了承された方が対象ですが今まで全員の方を訪問しています。訪問を待っていてくれる人がいることや、高根町では平成26年4月以降に生まれた赤ちゃんは、市の年間出生数の約35%になることがわかり認識を新たにしたところです。「子育ての昔と今」と題して「じいじ・ばあば学級」も行いました。「大変参考になった」「今時の子育てが分かった」という意見をたくさん頂き、実施して良かったと思っています。地域の方との交流や子育てに情報を提供する機会を作るため「愛育のつどい」を開催したところ予想外の200人もの参加があり、熱心な質問も出され有意義な一日となりました。また、定期的な「分班長会議」や「班員研修会」「班会議」などを行い、愛育班の浸透や皆さんからの意見や希望を取り入れています。今後も、多岐にわたる方法や取り組みにより、人と人とが繋がり「生きていくのにやさしい環境づくり」ができるものと考えています。

佳作

いままでとこれからと



兵庫県豊岡市竹野南愛育班 三輪 梨花子

由緒ある愛育班の長い歴史の中で、私たちの竹野南愛育班もそのひとつの存在です。

この手記を書く機会を与えられたので、改めて今までの歩みを振り返り、今後のあり方を考えてみました。

昭和58年、愛育班の話を持ちかけられた私たちの地区は、『へき地』と呼ばれていた上に『過疎地』とも呼ばれ始めていましたが、山間に子どもたちの元気な声がこだましていました。ほとんどの家は三世代同居で、農業の傍ら雪深い冬季間の出稼ぎや土木作業員で生計を立てていました。昔からの婦人会も健在でしたので、「愛育班をやってみないか」と婦人会に打診があったのがきっかけで、愛育班活動が始まりました。

私自身は、その当時の地区では数少ない勤め人だったので、何をするにも周囲の人に助けてもらっていました。愛育班でも班員や、止むを得ぬ事情で受けた分班長の仕事も、何とか周囲に支えられて務めることができました。そのときの温かい支えが忘れられず、退職後に役員を引き受けるのに何のためらいもありませんでした。

折も折、時代の流れか、あれほど堅固に見えた婦人会があちこちで解散の憂き目を見ることになってきました。婦人会と二人三脚だった愛育班も土台が怪しくなってきましたが、私たちの地区は先輩たちの地道な活動の基礎があったので、「愛育班は残そう」ということになりました。

あれから15年、細々と活動を続けてきました。中でも、保健師さんに助けられて、高齢化を見越した「介護ワンポイント研修」や「リフレッシュ研修」と称した楽しい企画など、継

続的に取り組めたこともありました。しかし、巷には健康情報があふれ、車社会になって女性もどんどん勤めに出られるようになった村に、愛育班の絆は細くなるばかりで、次から次へと活動を休止する分班が増えていきました。

平成16年の市町合併を境に、愛育班のあり方を変えざるを得ない状況がおき、愛育班活動について、たくさんの検討をしました。予算を含め、活動状況は大変厳しくなりましたが、平成19年に豊岡市で『ひょうご愛育の集い』が開催できたことは、力を貸してくださった方々のお陰と、日頃からの班員同士の結束力の賜物です。

県の「初めての子育て応援事業」が始まったことは、以前から子ども達との交流をすすめていた私たちには、またとない朗報でした。少子化の波はあっという間に押し寄せており、今や、どの年齢の児童生徒も10人以下、学齢前の子どもたちは5人にも満たない有様です。点在する集落の中で、それぞれ子育てをする数少ないお母さんたちに、何とか温かい交流の場をと願うのに、公民館だ保育園だ学校だなどといっている場合ではないのです。枠にとらわれず、地域全体を対象とした活動が必要と考え、そのように取り組んでいます。

子育て支援は班員自らも楽しむことができる活動で、力を入れて取り組んでいます。高齢化のすすんだ地域には欠かせない、高齢者を中心とした地域への声かけも続けています。班員は減ってきており、家庭訪問は難しくても、道端や会合で出会えば、目配り気配りしながら声をかけ、顔つなぎをしています。

愛育班の心が根付いている地区だからこそ、声かけ見守りも子育て支援ボランティアもごく自然体で、「できる人ができる時にできることを」というのを合言葉にやっています。無理はせず、楽しんで活動を続けていきたいと思います。前へ！